代表委員退任にあたって
――挨拶談義――

佐々木　　享

1990年８月から務めた技術教育研究会の代表委員をこの８月で退任させて頂いた。満８年間ご支持下さった全国の会員の方がた、この間会の運営にご尽力頂いた常任委員、ことに事務局の方がたに心から感謝申し上げます。

引退するわけではなく、常任委員としては残して頂けるので、次期の代表委員（河野義顕さん）の就任の挨拶があればよいと考えていたが、挨拶を書くようにとの編集部のお勧めがあったので、やや古い話を含めて挨拶談義をする。

技教研の初代の代表委員を７年間務めた長谷川淳氏は1977年８月の総会で退任し、原正敏氏に替わった。長谷川淳氏は『会報』に書いた退任の挨拶の中で、これで会合の度にきらいな挨拶をしないで済むのでほっとしているという意味のことを書いている。

長谷川氏の挨拶は、いわゆる月並みではなく、たいてい、事前に事務局長の私に、挨拶の内容について相談があった。いわゆる歯に衣を着せない人なので、（私の立場からは）当たり障りのある言辞も実は少なくなかった。私が生意気に「少し婉曲にいったらどうでしょうか」などと申し上げても、結局は聞き入れなかった。氏は、挨拶にはいつも原稿を作っておられたのである。なかなか真似のできることではないが、組織の人間として挨拶を大事にすることを教えられた。

私の前任の原正敏氏が「挨拶」の原稿を作っておられたのかどうか、私は知らない。いずれにせよ、ご自身の主張（と私には思えた）をそれこそ歯に衣を着せないで、あくことなく述べておられたようにみえた。氏の主張はその時期の運動に大事なことだったから、それはそれでよいのだと思った。

一般に代表者の挨拶は、かりに内輪の会議でのそれであっても、構成員に与える影響を通して結局世間にものを言っているのと同じことになる、と私は考えている。しかしそうはいっても挨拶は個性的でよいのだと思う。

1987年に私は、名古屋大学の職員組合の委員長に推された。当時の組合員は約1,500人ほどだった。折々に「挨拶」することは多かった。組合員のことを知らなくてはと思い、常日頃は『朝日』と『赤旗』しか読んでいなかったので、任期中は、組合員ことに職員の多くが読んでいるであろう『中日新聞』と、世間知らずでは済まないだろうと『日本経済新聞』をよく読んだ。それが挨拶の役にたったかどうか、自分では分からなかった。

私は、挨拶も講演も下手で、多くの方がたにご迷惑をおかけしてきた。事前に事務局に話すこともしなかった。この機会にお詫びしてご挨拶に代える。身内のご不幸で欠席された河野義顕氏は、誠実さがにじみ出たたいへん丁重なメッセージを寄せられた。新代表委員を中心にいっそうのご奮闘をお願いして、退任のご挨拶とする。